

AJEQ ニュースレター

秋季号の内容

AJEQ 全国大会を終えて：竹中
AJEQ 学会誌『ケベック研究』案内：小倉
大会要旨：(1) 研究報告：西川、(2) 特別企画：竹中、
(3) 特別講演：小畑、(4) セッション：加納

AJEQ 全国大会を終えて：竹中企画委員長

皆様のご協力を得て、拓殖大学を会場とした 2010 年度第 2 回全国大会（10 月 2 日）を成功裡に終えることができました。出席者は延べ約 50 名、報告は日本人 3 名、韓国ケベック学会からは 2 名の参加、特別講演者としてケベック人学者（ゴーヴァン教授）の招聘、そして特別企画として劇作家ロベール・ルパージュをめぐるドキュメンタリーの上映という枠組みでした。各内容については次頁をご覧くださいとして、ここでは企画委員長の立場から大会の内容をごく簡略に振り返ってみましょう。

第一に目下の当学会の研究者の主な傾向が、ケベック文学にあるということ。これは明白な事実で、ケベックにおける文学的想像力の深さと魅力をあらわしている証でしょう。昨年および今年の内容を通して、そこには豊かな研究上の可能性が潜んでいることを示唆していました。そして研究の質の高さは、十分評価されてしかるべきでしょう。

とはいえ第二に、当学会は“学際”学

会であることに留意しなければなりません。豊かな知的魅力を内在させるケベックですが、文学以外での報告は、今年は「ケベックの言語法をめぐる政治闘争」のみでした。これは企画委員会の努力だけでは限界があるのですが、ケベック研究のすそ野の広さを、今後、とくに若手の研究者に期待したいと思います。

一方、ケベックに関心のある一般の人たちの興味をひくために、親しみやすい企画も用意しました（映画上映）。この種の企画は今後も生かしていければと考えています。

そして第三に、研究大会は報告者のみで成り立つものではありません。開催大学側のゆきとどいた配慮（含・裏方の皆さんのご尽力）、ケベック州政府在日事務所のご支援などによってこそ、成功するものです。いささか自画自賛的ですが、その意味で、当学会はきわめて恵まれた人的環境にある、と実感できた研究大会でした。——竹中 豊（企画委員長）
全国大会のプログラムは以下を参照：
<http://www.ajeqsite.org/taikai.html>



リーズ・ゴーヴァン教授の特別講演

日本ケベック学会(AJEQ)とは

「日本ケベック学会」(AJEQ)は、日本でのケベック・フランコフォニーに関する学術研究・芸術文化交流などを振興し推進する学会です。ケベックやフランコフォニーにご興味のある方の参加をお待ちしています。

学会活動の詳細は以下のホームページ(HP)とブログをご覧ください。

HP: <http://www.ajeqsite.org/>

ブログ: <http://ajeq.blog26.fc2.com>

AJEQ 学会誌『ケベック研究』案内

『ケベック研究』第2号が、9月15日に完成しました。今回より編集委員会が充足し、査読制度が整いました。

第2号には、昨年の全国大会でのアンドレ・ジラルド氏の特別講演(ケベックにおける俳句の現状)や、ライシテに関する実に興味深いシンポジウム(ケベックとフランスの比較考察)を収録したほか、2本の研究論文と3点の書評も掲載することができました。

今後もケベック研究の幅広い射程を国内外に発信できる雑誌として成長していきたいと思えます。また国際的な認知度を高めるため、フランス語の論文を増やしていく予定です。

それでは、会員の皆様からの積極的な投稿をお待ちしています。なお、投稿規程、執筆要項、日程の詳細は、第2号の巻末をご覧ください。

小倉和子(学会誌担当理事)

2010年度全国大会の要旨（各セッション司会者によるまとめ）

1) 研究報告（西川葉澄）

まず、鈴木智子氏(明治学院大学文学研究科博士後期課程)による「ケベック児童文学の発展と『歴史物語』の変遷」と題する報告では、20世紀初頭では、歴史物語から題材をとって子どもたちの愛国心や宗教心を養うといった意味合いが強かったケベック児童文学が、ケベック出版界における1940年代の一時的な繁栄とその後の停滞を経て、1970年代のマルテルの作品以降、新たな発展を遂げた経緯が詳しく紹介された。

次に、荒木隆人氏(京都大学大学院法学研究科博士後期課程/ケベック大学モントリオール校政治学研究科修士課程)による「ケベック言語法を巡る政治闘争—個人の権利と集団の権利の相克—」と題する報告では、ケベック言語法における争点、ケベック人の定義における「フランス語」の役割であり、この問題における集団的目標と個人主義的原理の対立が詳細に分析された。いずれの発表も興味深いもので、その後、会場を交えて、活発な質疑応答がなされた。

2) 特別企画 ドキュメンタリー作品「ロベール・ルパージュ:ケベックから東京へ」(竹中 豊)

学会としてはユニークな催しだが、日本在住のマルク・カルパンチエ監督(NHKワールド・プロデューサー)の作品「*Robert Lepage: de Québec à Tokyo*」(約50分)が上映された。内容は、ケベックを代表する世界的に著名な演出家・俳優のロベール・ルパージュと日本との文化的かかわりあい、諸作品やインタビューなどを通じて探ったもの。「自らを発見するためには異国へ旅立て」と語るルパージュは、持ち前のケベック的感性と深い洞察力で日本の美意識を探る。ケベックの劇作家を知るだけでなく、日本人にとっても啓発されるところの多い秀作であった。当日はカルパンチエ監督も出席され、上映後、作品の趣旨などを直に聞くことができたのは幸いだった。なお、本作品はモントリオールのARTVで2008年に放映されたが、日本ではごく一部でしか公開されていない。

3) 特別講演 リーズ・ゴーヴァン教授(小畑精和)

今回の全国大会に、リーズ・ゴーヴァン(Lise Gauvin)モントリオール大学名誉教授を招待して特別講演をお願いした。ゴーヴァン教授はケベック文学と言語の問題を中心に研究をされているだけでなく、創作者として小説なども出版し、また、2008年から2009年にかけてケベック文学アカデミーの会長も務められている。

講演のタイトルは「冒険者と定住者」で、民話や伝説に始まり、『マリア・シャブドレーヌ』からモニック・ラリュから現代作家にいたるまで、ケベック文学において「この地に生まれ」という農民の生き方と、奔放な「森を駆ける男」*coureurs des bois*のイメージとがいかに変容してきたかが丁寧に辿られ、論じられた。現代の冒険者の空間は広がり、中には日本にまで到達する小説もある。また、二つのイメージは対立するのではなく、旅立ちと帰還へと変奏され、現代では新たなハーモニーを奏で始めていると締めくくられた。

4) セッション（加納由起子）

« Nomades et sédentaires revisités » (再考:冒険者と定住者)と題されたセッションは、全てフランス語で行われた。まず、韓国ケベック学会のSHIN Junga氏から「ロベール・ルパージュ演劇におけるケベックのイメージ」と題して、外国における閉塞感と帰郷にもなう解放感を対比させた発表があった。次に、同じく韓国のLEE In Sook氏は「『モントリオールの曙』に見るモントリオール」と題して、モニック・ブルーの小説を通して現代ケベック人のアイデンティティの問題を扱った。次に予定されていた真田桂子会員は事情により欠席となったが、最後に、小倉和子副会長から、「ダニー・ラフェリエールの謎めいた『帰還』」と題して、ラフェリエール小説作品における帰郷のテーマについての報告があった。発表後には、ゴーヴァン教授から総評として「冒険者と定住者」のテーマが、「帰郷」という概念に集約されることが非常に興味深いというコメントをいただいた。

後記

ニュースレター秋季号の話題は、10月2日に拓殖大学で行われた第二回全国大会です。モントリオールや韓国からご参加くださった発表者の皆様、ケベック州政府在日事務所のエティエ代表、本当にありがとうございました。これからもニュースレターで、いろいろな活動を取り上げていきますので、ぜひご愛読ください。(加納)

AJEQ ニュースレター

年3回発行
発行人・小畑精和
編集人・加納由起子
日本ケベック学会

AJEQ ホームページ

日本でのケベックおよび
フランコフォニーに関する
学術研究・芸術文化交流を
振興し推進する学会のHP

日本ケベック学会(10年10月～)

●主要役員

小畑精和(会長)	●広報HP担当
小倉和子(副会長)	加納由起子
立花英裕(副会長)	小松祐子
池内光久(監事)	安田 敬
曾田修司(監事)	宮尾尊弘
S. エティエ(顧問)	